Takashi AKIYAMA Poster Museum Nagaoka　2010-05-14

APM news 020

秋山孝ポスター美術館 長岡

歴史的建造物・金庫扉と雁木のある美術館（旧北越銀行宮内支店）

〒940-1106 新潟県長岡市宮内2-10-8
TEL 0258-39-1233

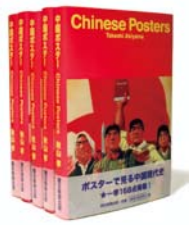
第5回 美術館大学　講演

中国ポスター展同時開催
5月1日（土）15:00-16:30　受講者：30名

「秋山孝 中国ポスターを語る」

中国ポスター展　会場

（上）講演の様子（下）質疑応答



「Chinese Posters」
朝日新聞出版（2008）

「東方のイラストレーションポスター展
中国・韓国・日本」展覧会カタログ、
多摩美術大学・産経新聞社（2007）

GW前半、晴れ渡った空から日差しが降り注ぐ中、今年度最初の美術館大学が開催された。今回のテーマは企画展にあわせて「中国ポスターを語る」である。会場には建国初期から文化大革命時代の中国ポスターが中心に展示されている。「中国の人々はポスターを家の中に飾る習慣があったという。ポスターに込められたメッセージが、毎日見続けられることによって徐々に国民の心に浸透し、思想として定着していく」（秋山孝「Chinese Posters」より）ということからもわかるように、当時、中国のポスターは思想統制の一手段として用いられた。また、多民族国家である中国では、同じ国内でも言語が異なることがある。そうした場合、言語による訴えよりも視覚によるものの方が影響が大きいとし、ポスターでの政治宣伝を図ったという。

秋山先生の講義を聞くなかで繰り返し感じたのは、毛沢東はかなりの策略家だ、ということである。毛沢東はポスターを効果的に使うことで政策が順調であるように装ったり、あるいは健康をアピールしたりもした。その中で1966年から1968年の3年間は毛沢東の神格化が際立つ期間である。「万歳」や「前進」といった言葉とともに、太陽を背負った毛沢東のポスターが多く制作された。

質疑応答の際には「プロパガンダポスターが最初にみられたのはどこでしょうか」という質問に対し、プロパガンダポスターの元はフランスやイタリアなどのヨーロッパであるが、中国でのそれは、他国と比べてはるかに長期間にわたり、数多くの種類と枚数のポスターが制作されていたという特色を語られた。（文責・森山奈帆／APM職員）